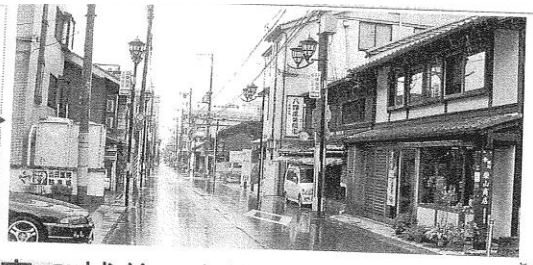
大津百町再生へ本格始動

町家の補修・改修に市が補助金



市の補助対象となる旧東海道沿いの町並み。「外観の統一や町家の改修で「大津百町の再生」を目指す＝大津市京町

旧東海道の風情ある町並みを守ろうと、沿道の町家の補修や景観を改善するため改修の費用を一部補助する事業を、大津市が始めた。7月に策定された中心市街地活性化基本計画の中核に位置づけられている「大津百町の再生」の一環。同市京町一、2丁目と中央一、2丁目に挟まれた旧東海道約500㍍に面した約100世帯の建物が対象で、向かい合わせの両1丁目と両2丁目で定める「まちなみ協定」に所有者が参加することが条件となる。

JR大津駅から京阪浜大津駅周辺にかけての中心市街地は、湖上交通の要衝でもある東海道の宿場町として栄え、「大津百町」と称された。その面影を残す町並みを生かそうと始めた事業で、市は「祭ょうちん」の似合うまちなみ」を基本理念に掲げている。

同地区は、かつてメーンストリートであった旧東海道沿い▽大津祭の曳山巡行の経路▽大津事件の史跡がある▽道路の拡幅予定がない―などの条件から補助対象に決まった。

事業の仕組みはまず、景観保全のための補修や改修のルールを定めた「まちなみ協定」を作成。沿道の建物の所有者がこの協定に参加すると、ルールに沿った補修や改修の際に、費用の一部が市から補助される。

沿道の47世帯のなかに20軒の町家が残る両1丁目では、すでに24世帯が協定に参加。町家の場合、窓や戸を格子や虫籠窓の伝統的様式に▽屋根は落ち着いた色調の日本瓦に―などのルールを定めている。

町家でなくても、室外機を格子で隠す▽アルミサッシを格子の内側に納める▽看板に原色を使わない―などと規定。このルールを基に市都市再生課と話し合い、補助内容が決まる。

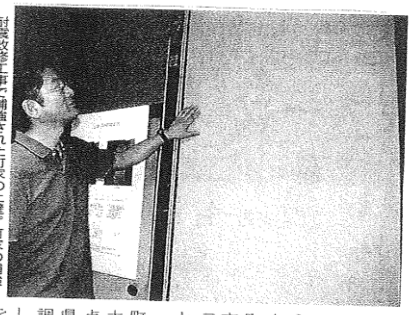
同課は「中心市街地活性化に向け、市としても力を入れている。地域の人にはどんどん申請してもらいたい」と話している。

産経

H20.09.20 産経

築112年の町家 耐震補強

大津「龍龍」キャンパス 改修工事終わる



耐震改修工事で補強された町家の土壁。町家の補強工事自体珍しいことという（大津市京町1丁目）

大津市の市街地にある龍谷大の町家キャンパス「龍龍」が、このほど耐震改修工事を終えた。壁にパネルなどを使い強度を上げた。町家の耐震補強工事は市内で初めてといい「今後の指針になれば」としている。

龍龍は築百十二年の町家で、昨年十二月、大学と地域の交流の拠点として開館したが、県建築士会大津支部の調査で強度不足と判明し、八月から改修工事を行っていた。

土壁の代わりに、土とパルプを固めて作ったパネルで約二十カ所を補強したほか、床の補強や離れの全面改修も行った。町家の特徴である虫籠窓も作り直した。

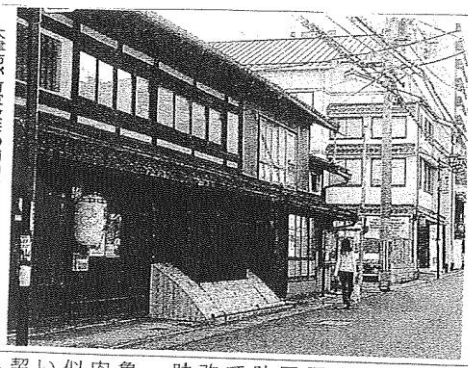
設計を担当した建築士白井勝好さん（64）は「町家の寿命を伸ばすことで、昔ながらの町並みも後世に引き継げる」と話し、龍龍担当の脇田健一龍谷大教授（50）は「安全で、きれいなキャンパスになった。多くの人に訪れてほしい」と期待している。（山田修裕）

京都

H20.09.20 京都

大津市 旧東海道沿いの景観保全へ

町家改修補助スタート



大津市が町家改修の補助金制度をスタートさせた旧東海道沿い

大津市は中心市街地の町家の改修に、独自の補助金制度をスタートした。旧東海道沿いにある「まちなみ協定」を結んだ住宅について、外観の整備に最大三百万円を補助。大津祭を支える町内にふさわしい、風情ある景観の保全と再生を図る。

国道161号交差点から中央大通り交差点まで約六百㍍の旧東海道が対象。住民たちが自主的に景観保全について交わした「まちなみ協定」に参加していることが条件となる。

同協定には、現在、対象区域の西半分にある二十四軒が参加している。

格子や虫籠窓など町家独特の特徴を残した建物が対象で、外観の修理工事費の三分の二を上限に最大三百万円、格子などの修理に同百万円などを市が補助する。通常の建築物でも、町家風の意匠に改修する際には一定補助する。

市都市再生課は「対象区域は大津祭の町内。お囃子や祭提灯が似合う町並みを守っていく取り組みが広がる契機にしたい」と期待している。（長谷川真一）

H20.09.20 京都

2008年（平成20年）10月19日 日曜日 滋賀 地域・総合 28

「大津百町」の個性再生を

旧町名の表示板設置へ

旧町の名を記した古い町名板（右）と、現在の住所表記（左）。旧町の町名板を復刻して、大津百町の再生を目指す

「大津百町」として栄えたまちのアイデンティティーを復活させようと、大津市と中心市街地の住民らが、かつての町名を記したレトロ調の「町名板」を設置する計画を進めている。早ければ来年度にも具体化する予定で「旧町の名は地域の歴史、文化を映した財産。観光面での演出効果とともに、住民のまちへの思いも強まる」と期待している。

中心市街地の住民ら計画

中心市街地では、かつて「桶屋町」「鍛冶屋町」「船頭町」など、土地の由来を色濃く映す百近い町名が残っていた。しかし、一九六二年に「中央」「長等」など現在の表記に変更され、住所からは宿場町として栄えたころの個性は薄れていた。

旧町の町名板設置は、「市中心市街地活性化基本計画」の掲げる「大津百町の再生」に向けた取り組みの一つ。市や住民で組織する、同計画の推進母体「活性化協議会」で、実施へ向けた検討を続けている。

観光効果も期待

かつて見られたほろろう製の町名板のように、町並みに似合うレトロなものを目指しており、今後、デザインや色調、設置する場所など、具体的な検討に入る。並行して、市に作製費用を予算化するよう求めていく。

検討部会代表の白井勝好・大津祭曳山連盟理事長は「歴史ある名前の復活は、新しい住民や訪れる人にとっても、まちをより深く知ってもらうきっかけになる」と話している。（長谷川真一）

H20.10.20 京都

屋外で「大津百町市」

にぎわい創出 町家の利活用促進へ

「大津百町市」の会場となる天孫神社境内
（大津市京町３丁目）

来月から月１回

手作り品販売 出店希望者後押し

大津市は十二月から月一回、中心市街地の町家へ出店を希望する人たちが、手作りの品を販売する屋外マーケット「大津百町市」を始める。まちなかにぎわいを呼び込み、町家の利活用を促すムードづくりになるよう期待している。

市街地に数多く残る町家に似合う「手作り」「環境にやさしい」「自然にやさしい」商品をテーマに、工芸品や食品、雑貨などを販売してもらう。

初回は十二月六日で、天孫神社（同市京町三丁目）境内をメーン会場に、二百四方の販売スペースを二十三区画設ける。神社周辺の町家所有者にも協力を呼び掛け、軒先にスペースを設けることも検討する。

大津市は「中心市街地活性化基本計画」で町家の利活用促進を打ち出している。しかし、住居や店舗としてのニーズは多いが、貸し手となる住民側の反応は鈍いという。市都市再生課は「百万遍知恩寺（京都市左京区）の手づくり市のように、こだわりの品々で、にぎわいを呼び込みたい」と話している。

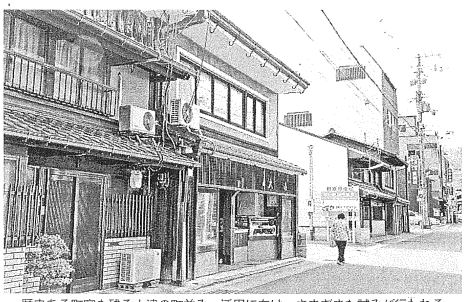
初回の出店希望の受け付けは十二月十六日まで。詳しくは同課☎077（528）2501。（長谷川真一）

H20.11.05 京都

貸し手探しにイベントも

大津「町家じょうほうかん」

中心市街地に残る町家を生かしたまちづくりを進めようと大津市が立ち上げた町家賃貸の仲介窓口「大津百町町家じょうほうかん」が、町家の貸し手が見つからず苦戦している。これまでに商談が成立したのは、龍谷大が昨年暮れに開設した町家キャンパス「龍龍（りゅうりゅう）」（同市京町）のみ。市や関係者らは「町家が店になったにぎわい」を模擬店でシミュレートするイベントを計画するなど、所有者らの理解と協力を得る試みを続けている。



歴史ある町家も残る大津の町並み。活用に向け、さまざまな試みが行われる＝大津市中央

大津市の平成16年度の調査で、JR大津駅から京阪浜大津駅にかけての市中心部一帯には、かつて交通の要衝として栄えた面影を残す町家が1600軒ほど残り、うち1割以上が空き家であることが判明。「町家資源として活用しようと開設した。

事業にあたって市は、地元住民のネットワークに着目し、町家の空き情報の収集や家主との交渉などを、大津祭を運営する「大津祭曳山連盟」に委託。同連盟は中心市街地に住むメンバーの力を借りて交渉を続けているが、今のところ町家の貸し手は見つかっていない。一方、市都市再生課には、借りたいという問い合わせが約15件あった。

貸し手が現れない理由としては、貸した町家に手を加えられることに抵抗を覚える所有者が多いことのほか、地域の変化を指む保守的な気質があることを指摘する声もある。

この状況を打開するため同連盟は、県建築士会大津支部の協力を得て、対象となる町家の図面を無料で作成し、耐震診断するサービスに着手。町家のデータを収集するとともに、協力を求める交渉の糸口を探るためで、昨年度に空き家を含む5軒を調査。今年度以降も年間5軒ずつ調査することにしている。

また12月6日には、にぎわいを模擬店でシミュレートする手作り市「大津百町じょうほうかん」は昨年7月、これらの町家を地域の資源として活用しようと開設した。

市」を、JR大津駅近くの天孫神社一帯で開催。新たな店ができることで街が活性化することを実感してもらうとともに、貸し手と借り手を結びつける機会を作るのが狙いという。

市は「進出に意欲的な事業者はいるのに、地元の協力が得られないのは残念。さまざまなアプローチを試みて、少しずつ理解を得ていきたい」。同連盟は「一草一木の根で活動を続けるしかない。せめて、今年度中に1件は話をまとめたい」としている。

H20.10.30 産経

2008年（平成20年）11月24日 月曜日

大津百町市 出店希望 予想の倍

市、スペース拡大

大津市が中心市街地を舞台に、十二月六日にスタートさせる手作り市「大津百町市」で、初回の出店希望者が予想の二倍以上となる人気となった。市は予定より規模を拡大して開催することにし、「個性豊かな店が集まる名物市に育てたい」と手応えを感じている。

百町市は、月一回程度、天孫神社（京町三丁目）境内と、周辺の町家の軒先などで、こだわりの手作り品を販売する屋外マーケット。初回の出店希望者は、十月中旬から募集を始めた。

市は当初、二十一三十区画を設ける予定だったが、締め切りまでに、市内外の約六十組から申し込みがあった。扱う品物は布製の小物や陶器、野菜、ジャムなど幅広いジャンルがそろった。

企画した市都市再生課は、ほぼすべての応募者に出店スペースを用意することにした。同課では「これほど反響が大きいとはうれしい誤算。観光客から住民まで、多くの人に足を運んでほしい」と話している。午前十一時から午後四時まで。雨天中止。同課☎077（528）2501。（長谷川真一）

「大津百町市」で掲げられる、旧町名を記したのぼり

H20.11.24 朝日

こだわり「百町市」で大津に活気を

来月から毎月1回 中心部の神社一帯で

来月6日 天孫神社 出店者募る

町家の魅力アピール

大津市中心部の神社やその一帯で、「手作り」「環境やからだにやさしい」にこだわった品を販売する「市」が、12月から毎月1回開かれる。百百時代に湖上交通の要所や旧東海道の宿場町として栄えた大津のにぎわいを取り戻そうと、同市が企画した。第1回は、6日に天孫神社（同市京町3丁目）と、その周辺で開催予定で、出店者を募っている。（橋本新之介）

市の名称は「大津百町市」。同市逢坂1丁目の関蟬丸神社を頂点に、琵琶湖岸に向け三角に広がる地域が、かつて「大津百町」と呼ばれていたことにちなんだ。百町には、江戸期から終戦ごろまでに建てられた約1600軒の町家が今も健在。うち1割は空き家だ。計画では、協力してくれる町家の軒先にも市の店舗を出す。訪れた人たちに大津の町家の魅力を感じてもらい、町家再生につなげようとの狙いもある。

2回目からは毎月第3土曜日に開催定。初回の12月6日は午前11時～午後4時。出店1件（4平方メートル）につき1千円が必要で、出店希望者は16日までに市都市再生課（077・528・2501）に申し込む。食品の販売も可能だが、製造者名や賞味期限、原材料など明記し、調理済みのものに限られる。保健所発行の営業許可書も必要になる。10月末時点で申し込みは、木片で作った小物や、手作りの染め物販売など約10件という。

同課は「百町市には、遠くから観光客が来ることも大切だが、何より近所の人が参加して盛り上げて欲しい。『市に行けば、いいものに出会える』という催しにしていきたい」とする。

大津百町市が開催される際に掲げられるのぼり旗＝大津市浜大津１丁目

H20.11.09 朝日

H20.11.17 読売

「町家守る 遺志継ぐ」

大津 考える会長・青山さんしのぶ会

大津市内に残る町家を生かす活動に貢献し、今年9月に急逝した「大津の町家を考える会」会長の青山菖子さん（当時60歳）をしのぶ会が16日、同市中央の「大津百町館」で開かれ、青山さんゆかりの市民ら約30人が集まった。

町家を活用した同館の広間にはスクリーンが置かれ、幼い頃の青山さんの写真や、同会の活動ぶりを報じる新聞記事などが映し出された。

会発足以来、青山さんが会を活性化させようと、いつも何か考えていたことや、「百町館にはふるさとに戻る気持ちで来てほしい」と会員にメールを送ったことなどのエピソードが披露された。

2004年に大学の授業を通じて知り合った脇田健一・龍谷大教授（50）は「一緒に大津市内を歩こうね」といつも言っていた。学生や自分にもっと町家のことを教えてもらおうと思っていたのに」と改めて肩を落とした。

現在、同会は会長不在のまま。12月14日に総会を開き、後任を決定する。事務局の阿部圭宏さん（50）は「会員の減少や運営資金の問題はあるが、青山さんの遺志を継いでいきたい」と話している。

青山さんは主婦業の傍ら、同会の仲間とともに、同市中心街の旧町名を調べて「大津百町物語」（サンライズ出版）を出版したり、町家で歴史文化を学ぶ「萬塾」を開いたりして、保存活動に尽力した。

青山菖子さん

生前の写真を見ながら、青山さんをしのぶ参加者ら（大津市で）

H20.11.17 朝日

青山さんの遺志継ごう

町家保存へ決意新た

しのぶ会

大津の町家保存に尽力し、9月に60歳で急逝した「大津の町家を考える会」会長の青山菖子さんをしのぶ会が16日、大津市中央1丁目のまちづくり大津百町館であった。友人ら約40人が集まり、早すぎる死を悼むとともに、まちづくりへの遺志を引き継ごうと誓い合った。

青山さんは静岡県生まれ。結婚を機に大津に移り住んだ。町家の魅力をまちづくりに生かそうと97年に発足した同会に参加。会では大津に百あったとされる旧町名を調べて歩き、99年には「大津百町物語」を出版。01年には丸屋町商店街にある町家を借り受け、同会の活動拠点としてまちづくり大津百町館を開設した。03年から2代目の会長を務めた。

「すぐにだれとでも親しくなれ、お母さんのような存在だった」「町家の価値を教えてくれた。今後も遺志を引き継ぎたい」――。お茶とお菓子をつまみながら、一人ひとりが青山さんとの出会いや思い出を紹介した。

嘉田由紀子知事からは「自分たちの町の魅力を発見し、自分たちで守っていくという自助・共助のモデルになった」、上原恵美・びわ湖ホール前館長からは「大津の町は大きな存在を失ってしまった。逝去を悼みます」とのメッセージが寄せられた。

青山菖子さん
＝07年10月

青山さんゆかりの町家で、参加者一人ひとりが思い出を語り、遺徳をしのんだ＝大津市中央1丁目のまちづくり大津百町館